



Vol.29

ゆうことみゆきのふくふくトーク

ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

ワッカウシカムイ(水の神)



この時期、北海道でもさすがに水遊びしたくなる日があるよね。

私も二風谷で暮らしていた頃は、近くを流れる沙流川によく息子たちを連れて行った。今でも忘れられないのは、川の水で冷えた長男が川の縁に立ってオシッコしようとした時のこと。ズボンを下げた瞬間、「そこでするなっ！山でしょー！」と萱野茂先生の怒鳴り声！滅多に大声なんか出さない萱野先生だけに、息子は跳び上がって「ヒューって山の方に走っていったの。」

これは、「ワッカウシカムイ(水の神)」に不浄なものを直接注いではいけない」というタブー(禁忌)で、アイヌ社会では広く見られます。でも私はへそ曲がりだから、萱野先生

に訊いたの。「土にだって土の神様がいらっしやいますよね？オシッコかけてもいいんですか？」そしたら、「いいんだ。土の神様は汚いものをきれいなものに変えて、水の神様のところまで運ぶ役割を持つてるんだ」って。

このような考え方をよく表しているのが「ヤク サクノ カント オロワ アランケブ シネブ カ イサム(役割無く天から降ろされたものは「つもなひ」という言葉。この世界のあらゆるものは、なんらかの役割を持って存在しているという考え方がアイヌの伝統的世界観の基本で、とても心惹かれます。そうはいっても、やはり重要な役割を果たす位の高い神様と、そうでもない神様がいらっしやるみたいなんだけど、水の神様はVIPグループの筆頭！どうしてでしょうね？美幸さん。



VIPたる所以？

それはやっぱり水がなくて生きることができないということに尽きるよね。人間だけでなく動植物すべてが水に生かされている、いのちの源だから。

アイヌは、水は山の神さまのお乳で、私たちはそれを呑んで丈夫に育つのだと考



えていたみたい。物語にも、カエルが自分の遡る川を探すのにシロカニピサク、コンカニピサク(銀の柄杓、金の柄杓)で川の水を味わいながらやって来る、水の神のお乳の味を調べるので特別に立派な容器を使ったという話も。

かつて、どの家の祭壇にも水の神が祀られ、白老では地鎮祭にも身近な神としてシランバカムイ(山の神で建築材を授ける神)、又サコロカムイ(穀物の神)とともに住む者に水を供給する神として祀られたんだって。国造神が火の神と村の神という名高い神と、水の神に国を託したという話からも、水の神がVIPで大切な神であることがわかるよね。

以前、夜に水を汲む時のおまじないの言葉を教わったの。「ワッカ モーシ モシ、ワッカ モーシ モシ、ワッカ カフブカラ ケク ナ(水よ目覚めて、水よ目覚めて、水をもらいに私は来たのですよ)」と唱えてから水を汲むんだって。夜は水の神も寝ているので、声を掛けてから水を汲むもんだって。急に汲んだら水の神がビックリして飛び起きた拍子に水が濁ってしまうからなんだとか？「ワッカ モーシ モシ……」結構、耳に残るアイヌ語だよな。機会があつたら使ってみよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。